

## 幼児期の身体表現の特性Ⅱ

—身体表現と認識との関連—

本山益子（岡崎女子短期大学）西 洋子（東洋英和女学院大学）

### Ⅰ. 研究目的

子どもが自分のからだや動きを用いて何かを表現している様子は、様々な活動の中でよく見ることが出来る。幼児期は、からだでの自由な表現が、最も自由にはずかしがらずにできると言われる<sup>1)</sup>時期であり、この時期は、すべての人間の生活史において極めて創造的な段階と捉えられている<sup>2)</sup>。これらのことから、一般的には幼児の身体表現の特徴は、「型にとらわれない」「個性的」なものとしてされている。しかしながら、筆者らが行った先行研究<sup>3)</sup>では、多くの子ども達が、例えば花を手のひらの開閉で表現するといったように、定型的な身体表現を行う割合はかなり高く、年齢が進むにつれ、同じ表現に集中する傾向が強くなる事が確認された。一方で、保育者が表現する題材を直に観察する機会を整えたり、経験を喚起する働きかけを行うことで、定型化した子どもの表現は、自分で感じ、考え、表現する「自分なりの」表現に変わっていく可能性が示唆された。

したがって、日常の保育の中で、より自由で自発的な身体表現を育む援助をするためには、子どもが表現の題材をどのように認識しているのか、また、その認識は、実際に動きとして表れる身体表現にどのように反映されているのかについて理解を深めることが、重要な意味をもつと考えられる。

そこで本研究では、表現の題材に対する認識と、実際の身体表現との関連性を把握することを目的に、子どもが身体表現を行った直後に、表現した題材についてのインタビューを実施し、その認識の特徴を検討した。

### Ⅱ. 研究方法

#### 1. 対象

対象は福井県、東京都、愛知県の私立の幼稚園・保育園に通園する年少児50名（男児22名・女児28名）、年中児41名（男児20名・女児21名）、年長児54名（男児29名・女児25名）、合計145名であった。

#### 2. 調査期間及び場所

収録は1996年9月、11月及び1997年2月に、各園の遊戯室などで身体表現の収録を終えた後、付近の別室にてインタビューを行った。

#### 3. 題材

幼児の生活に身近であること、さらに、題材に固有の、基本的な動きで表現されることが予測できるという身体表現の観点による理由で、題材を「花」「鳥」「汽車」「うさぎ」「こま」「ねこ」の6種類とした。

#### 4. 研究の手順

対象児は、ひとりずつ身体表現の収録を終えた後、験者のインタビューに答え、その様子をVTRで収録した。インタビューは、「今度は一杯お話ししてね」という言葉かけから始め、できる限り自由にリラックスして話ができるよう配慮し、十分に話を聞くよう心がけた。その中で行った質問は次のとおりである。まず、題材の違いによる関わり方の特性はあえて考慮せず、どの題材についても共通した問いかけによって、その題材との関わり具合を見ようとしたため、「どこで題材を見る？」とたずねた。次に、認識の具合を見る第1段階として「～ちゃんの知ってる題材はどんなのか教えて」と質問した。そして、第2段階として具体的な題材の様子を聞くために「その題材は、どんなふう～？」とたずね、チェックリストに記録した。

#### 5. 分析の方法

インタビューでの内容を記録したチェックリストと収録した映像をもとに、各題材ごとの対象児の回答を以下の観点から検討した。

##### (1) 題材との関係

①身近（家にあること）、②周辺（幼稚園や保育園も含めた家の周辺で見ること）、③特定の所（動物園や駅などの特別な場所で見ること）、④視聴覚資料（本やテレビ・ビデオ等で見ること）、⑤N. A（答えない）。

##### (2) 自主的な回答のカテゴリー（第1段階での回答）

①名称、②色、③形・大きさ、④擬音語・擬態語、⑤様子、⑥その他（「こんなの」と身振りであらわすなど）、⑦N. A

##### (3) 様子についての主な回答内容（第2段階での回答）

各題材の特徴的な、また数多く見られた回答内容を7例ずつ抽出し、N. Aを含め、8項目とした。例えば題材「花」では①咲いている②枯れる③折れる等。

これらの項目に該当する人数を、年齢と男女別に定量化し図1～図6を作成した。併せて、個々の項目の出現率(%)を算出し、結果と考察の文中で用いた。なお、図1～図6には、身体表現との関連性を検討するために、先行研究<sup>4)</sup>の主要な身体表現の結果も併記した。そして、各題材に対する認識の拡がりや深まりを見る資料とするために、題材別にその回答数の平均と、その最も長い回答を構成している文節数の平均を求め、考察に用いるとともに図7を作成した。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 題材別の認識の特徴

題材別の認識の特徴を、年齢や男女の差を視点としながら以下にまとめる。

##### (1) 題材「花」の特徴

題材「花」に関しては、図1に示すように、全体の72%にあたる105名が家で見る「身近」な関係と答えている。そして、その「花」についての自主回答では、チューリップやひまわりなどの「名称」を答えている対象児が年少男児は4名(18%)と少ないが、それ以外では、どの対象児においても「名称」での回答が60%を超えている。しかし、その具体的な様子については、「咲いている」という回答すら、年少で3名・年中で4名・年長で2名と大変少なく、いずれの年齢でも何も答えていない対象児が非常に多い。この結果は、日常生活の中で花を目にしていても、具体的な「花」の様子を話すことができない対象児が大半であることを示している。つまり、今の幼児たちは外界と直接的な「ふれあい」をしなくなり、外界に対する細やかで深い認識に欠けると指摘されているように<sup>6)</sup>、匂いを嗅いでみたり、手に触れてみるという主体的な関わりから得られる、自分なりの具体的な「花」の認識ではなく、「名称」という知識に偏っていることがわかる。

##### (2) 題材「鳥」の特徴

図2に示すように、「身近」や「周辺」で「鳥」を見る対象児が大半を占めている。そして、「花」と同様に、「名称」による回答が多く見られたが、どの年齢においても、様子についての回答も多様であることが「花」との違いである。特に、「食べる」(年少30%・年中41%・年長35%)や、「飛んでる」(年少20%・年中27%・年長50%)に多くの回答が得られた。この2つの回答を年齢別で比較してみると、年少と年中では「食べる」が多く、年長では「飛んでる」が多いという違いが見られたが、日常生活の中で視覚的にとらえることのできた鳥の様子を認識していることがわかる。

##### (3) 題材「汽車」の特徴

題材「汽車」は、図3に示すように、「特定の

所」や「視聴覚資料」で「汽車」を見るという回答がほとんどである。年中と年長では、このビデオやテレビなどの「視聴覚資料」という回答が、女児において10%台であるのに対し、男児では約半数を占めており、男児の乗り物への関心の高さを示している。しかし、その様子に関する回答においては、「走ってる」や汽車特有の「煙・蒸気」「エントツ」「線路」などで男児の方がわずかに多いとも言えるが、その回答の割合はわずかなものである。さらに、無回答が全体の30%にも及んでいることや、年少での「名称」の回答のほとんどが、「トーマス」や「新幹線・雷鳥」などであったり、さらに「色」では、黒以外の回答も多く含まれていることから、汽車に対する認識の不確かさが読み取れる。

##### (4) 題材「うさぎ」の特徴

題材「うさぎ」では、図4に示したように、題材との関係が、動物園という「特定の所」と、幼稚園という「周辺」に分かれた。これは対象としたひとつの幼稚園で、「うさぎ」を飼っていることによる違いである。そして、この「うさぎ」を飼っている幼稚園の対象児の方が、他の対象児より、「うさぎ」の様子を回答した回答数の平均(1.38と2.17)と、その回答を構成している文節数の平均(1.84と2.37)のいずれも多い結果となっている。このことは、題材との関わり方の頻度の違いが、認識の拡がりや深まりに影響を与えていることを示唆している。

また、自主回答はどの年齢も「色」による回答が多く、様子に関して「無回答」であった対象児は、年少で8名・年中で3名・年長は0名で、その割合は他のどの題材よりも少ない。そして、「食べてる」「跳んでる」「遊んでる」などをはじめとして、全体的に視覚的にとらえることのできた様子に関する回答が多く得られたが、「目が赤い」や「耳が長い」という特徴を話した対象児はわずかであった。すなわち、動物園や幼稚園の「ウサギ小屋」という作られた空間において観察することのできる、限られたうさぎの様子を認識していることがわかる。

##### (5) 題材「こま」の特徴

題材「こま」では、図5に示すように、年少では、どの項目においても何も答えない対象児が他の年齢よりも際立って多い。そして、先行研究<sup>6)</sup>との照合により、「こま」の様子を話さず身体表現も行わなかった対象児が11名も確認できた。すなわち、これらの対象児は「こま」についての認識がないために、それを言葉やからだで表すことができない段階だと考えられる。

しかし、年長になると様子の回答を構成する文節数も多くなり、男児が2.79であるのに対し、女児は2.04であり、わずかながら性差が認められた。









●男児  
○女児

分類項目\年齢		年少 N=50	年中 N=41	年長 N=54
題材との関係	身近	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○
	周辺	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○
	特定の所			
	視聴覚資料	●		
	N. A	●●●●●● ○○○○○○○○	○	●
自主回答のカテゴリー	名称			●
	色	●●●●●● ○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○
	形・大きさ	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○
	擬音語 擬態語			○
	様子	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○
	その他	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○
	N. A	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○
主な様子の回答内容	回す	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○○○
	ひも	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○
	棒	● ○	●● ○	●●●● ○
	手	●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●● ○○○○○○○○○○
	丸い	●●●●●● ○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○
	きれい		●●●●●● ○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○
	クルッ・クル	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○
	N. A	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○
身体表現	腕を伸ばす	●●●●●● ○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○
	手を合わせる	●●●●●● ○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○
	回る	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
	行わない	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○	●●●●●●●● ○○○○○○○○○○○○○○

図5. 題材「こま」





さらに、年中と年長では、男児に「回す」「ひも」「棒」という、回すという直接的な体験から得られる回答が多く、女児では「丸い」「きれい」「クルッ・クルー」などの、形や回っている様子を表した回答が多いという違いが確認できた。つまり、この違いは、「こま」の認識における観点の男女差を示した結果として興味深い。また、これらの認識に、視覚的な回答が少ないことが他の題材との違いであり、この違いは「回す」という主体的な行為としての関わり方に起因しているものと考えられる。

#### (6) 題材「ねこ」の特徴

題材「ねこ」は、図6に示すように、全体の98%にあたる142名が、家やその「周辺」で見ると答えており、大変親しい関係にあることがインタビューを通して感じ取れた。

そして、その様子に関しても多くの回答が得られ、その回答は「食べてる」「遊んでる」「歩いてる」「ないてる」などをはじめとして多様であり分散していた。「ニャー」という回答が年少の女児に際立って多い(36%)こと以外には、視覚的な回答が多く、年齢差・男女差ともに認められない。全体としては「お魚くわえて、食べて、手で骨をとっちゃった」、「座ったり、車の後ろ隠れたりする」や「電話の上ののって、ニャオーニャオー言う」などの、日常生活の中で独自の認識を獲得していることを示す回答も多く、「ねこ」との親しい関係が、このような認識を導いていると考えられる。

### 2. 認識の全体的な特徴

#### (1) 題材の関係と認識

今回対象とした145名の子ども達のインタビュー結果を、項目別にその割合によってまとめたものが表1である。なお、この表には、定型表現の出現との関連性を検討するために先行研究<sup>7)</sup>において定型化が認められた身体表現の結果も併記してある。

この表より、題材との関係を見てみると、家やその周辺で見ることのできる比較的身近な存在である題材は、「花」「鳥」「こま」「ねこ」であり、「うさぎ」については、「周辺(幼稚園)」で日常的に見ることができるという回答もあるが、この場合も「動物園」と同じく「ウサギ小屋」という作られた空間での「受動的な観察<sup>8)</sup>」であり、どちらかと言えば非日常的な存在であると言える。同じく「汽車」についても「特定の所」で、あるいは、日常においては、ビデオやテレビなどの「視聴覚資料」を通して目にする遠い存在であるという、題材との関係の違いがわかった。

次に、題材についての自主的な回答の特徴としては、「名称」がある題材では知っている名称を回答するが、全体的には、「色」による回答が比

較的多く見られたことが特徴的であった。さらに、その様子について詳しくたずねた結果、「花」については全体の61%の対象児が、その様子について何も話をしてくれなかったが、他の題材では、全体的にそれぞれの題材に関する話を数多く聞くことができた。「鳥」「うさぎ」「ねこ」という動物の題材では、それぞれの特徴的な様子よりも、「食べてる」ことを話した対象児が多いという共通性が見られたことが特徴としてあげられる。また、「こま」以外の題材では、題材を視覚的にとらえた回答がほとんどであり、他の感覚を働かせることなく、おもに視覚を通して題材の認識を形成していることがわかる。しかし、今回の設問からは、見ることの質の違いについて明らかにすることができなかった点が課題として残されたものとする。

#### (2) 認識の広がりや深まり

題材の様子についての認識の広がり(平均回答数)と深まり(平均文節数)を見るために作成した図7からは、「鳥」「うさぎ」「ねこ」という動物の題材が大変よく似たグラフを示していることも興味深い。一方、「汽車」と「花」は平均回答数が1以下であり、どちらかと言えば、認識が希薄な題材であると言える。しかし、「花」については、その平均文節数が高く、「花」の様子を話した対象児の「花」に対する認識が深いことがわかる。つまり、「花」に対する認識には、個人差が見られることが特徴としてあげられる。この特徴は「こま」についても見られるが、「こま」の場合は年齢差や性差であることは先述したとおりである。

### IV. まとめ

今回のインタビューからは、幼児を対象とすることの楽しさと難しさを痛感するに至った。そして、身体表現の観点から設定された、限られた題材の結果ではあるが、その題材との関係や先行研究<sup>9)</sup>での定型表現と関連させることにより、題材の認識について次のようにまとめることができた。

まず、今回の題材の中で、「花」「こま」においては、題材が自ら動かないため、その題材そのものを漠然と目にすることから得られる情報は限られている。そして、多様な情報を得るためには、様々な感覚を動員した主体的な関わりが対象児に求められ、その主体的な関わりの有無が、その題材に対する認識に反映していた。また、「鳥」「汽車」「うさぎ」「ねこ」では、題材そのものが動くという特性をもっており、対象児は受け身の状態であっても、視覚的な情報を多く得ることができる。したがって、その見ることの頻度の違いが、視覚的な認識の獲得に影響を与えていることが推察できた。しかし、これらの題材において

表1. 各題材における関係と認識の特徴

N = 145

分類項目\表現題材	花	鳥	汽車	うさぎ	こま	ねこ	
関係	身近	72%	28%	1%	3%	61%	12%
	周辺	22%	61%	6%	30%	30%	86%
	特定の所	3%	6%	51%	55%	0%	1%
	視聴覚資料	2%	4%	31%	10%	1%	1%
	N. A	1%	3%	12%	3%	8%	1%
自主回答	名称	65%	62%	18%	1%	1%	10%
	色	23%	8%	22%	56%	17%	53%
	形・大きさ	5%	2%	10%	8%	25%	3%
	擬音語・擬態語	0%	1%	1%	1%	1%	11%
	様子	6%	12%	21%	25%	39%	17%
	その他	6%	12%	17%	13%	18%	10%
	N. A	10%	9%	20%	8%	17%	13%
主な様子の回答内容	食べてる		36%		48%		26%
	遊んでる		10%		16%		13%
	飛んでる		33%				
	とまっている		14%				
	走ってる			21%			
	煙・蒸気			14%			
	速い			12%			
	跳んでる				30%		
	ピョン・ピョン				19%		
	回す					48%	
	クルッ・クルー					31%	
	ひも					18%	
	ニャー						14%
歩いてる						12%	
N. A	61%	16%	30%	8%	13%	10%	
身体表現	手首を合わせ指先を開く	47%					
	はばたく		79%				
	腕で車輪をつくる			54%			
	両手で耳をつくる				82%		
	両足跳び				81%		
	回る					61%	
這う						54%	

\* 「主な様子の回答」は各題材で10%以上の出現率のもの  
「身体表現」は各題材の定型表現  
□は50%以上の出現率を示す

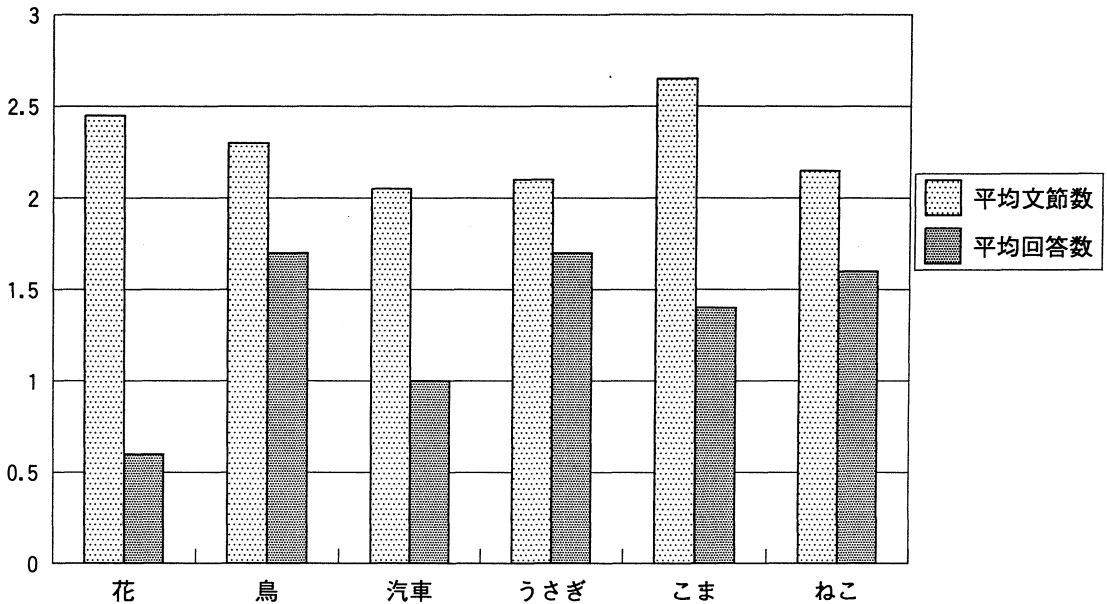


図7. 様子の平均回答数と平均文節数

も、主体的な関わりを通して認識の質が深まることは言うまでもない。

次に、この認識の特徴と先行研究<sup>10)</sup>における定型表現の獲得との関連性について検討した結果、大きく次の2つのタイプに分類することができた。

まず「花」と「汽車」のように、その題材の認識が浅く不確かであるにもかかわらず、特徴的な動きとしての定型表現が認められるタイプがあげられる。「汽車」では、子ども向けテレビ番組のビデオから、歌とともに定型表現が発信されている背景<sup>11)</sup>があり、「花」では、身体表現の出現に、幼稚園による違いが認められた。したがって、このタイプにおける定型表現の獲得要因が認識ではなく、メディアや幼稚園・保育園などの環境である可能性が高いことが明らかになった。

そして、もうひとつは、その題材に対して多様な認識が獲得されているにもかかわらず、定型的な身体表現が認められるタイプであり、「鳥」「うさぎ」「こま」「ねこ」がこれに該当する。さらに、この「鳥」「うさぎ」「ねこ」については、「汽車」と同じく、子どもと同じ身体表現がビデオからも発信されていることが確認できた<sup>12)</sup>。特に、このビデオと同じ特徴的な動きに定型化が認められる「鳥」「うさぎ」は、各自の多様な認識とビデオによる影響のいずれもが、この定型表現の獲得の要因になっている可能性があると考えられる。

しかし、「ねこ」に関しては「こま」と同様に、定型表現が「這う」「回る」という移動運動であり、特徴的な動きとしての集中化は認められず、子ども達が自分なりの表現を工夫している様子も確認できた。すなわち、この「こま」「ねこ」と

いう2つの題材の例からは、直接的な体験にもとづくと考えられる深まりが認識に見られたり、認識が詳細な独自の内容から構成されているという特徴が把握された。つまり、各自が題材に対してもっている認識の質が、身体表現の出現に影響を与えているものと考えられる。換言すれば、自分の五感を働かせた体験に裏付けられた具体的な認識の存在が、自分なりの表現を獲得させる重要な要因であると言えよう。

さらに、「指遊びでの指という手が構成するミクロ有機体は多様なものを認識していく<sup>13)</sup>」のと同様に、ビデオなどから発信される手を中心とした身体表現の共有も、子どもの認識を促す経験として位置付けることができる。つまり、認識ともなわない定型表現であっても、その「表現行動によってそれまで本人も意識していなかったものが喚起され、形を作り、逆に内からの衝迫が表現を生み出<sup>14)</sup>」すことが期待できる。そして、子どもたちは「多様な直接的感覚経験と身体全体でぶつかれるような生活体験空間、そして子どもたち自身が自由にそこに浸れる時間<sup>15)</sup>」の中で、「心の中にあるイメージが身体に投影されて、そこで初めて本来のイメージが成り立つ<sup>16)</sup>」活動を繰り返し、自分なりの身体表現を確立していくと考えられる。そして、この認識と身体表現の関わり方の過程を、今回の「花」「汽車」から、「うさぎ」「鳥」を経て、「こま」「ねこ」という題材に見られた定型表現の中に確認することができた。

つまり、子ども達が豊かな認識や自発的な身体表現を獲得するためには、直接関われる生きた情報のある環境が必要であることは言うまでもなく、

それらと五感を働かせた主体的な関わりをすることが重要である。さらに、一方通行的で定型化されがちな側面をもつメディアを含む現代の子どもを取り巻く様々な環境からの情報を、うまく消化・統合することができるような働きかけが保育者や親に求められているのである。

したがって、今後は、様々な環境が身体表現の獲得に与える影響を検討するとともに、今回のインタビューからは明確にすることができなかった、題材との様々な関係と獲得された認識の質についての関連性を探求したいと考える。

## 謝辞

この研究に際し、快く協力してくださった幼稚園・保育園の先生方、関係者の方々と子ども達に心より感謝いたします。

## 注

- 1) 小林美実, 音楽教育と音楽性の発達, 別冊発達6, 保育の科学, pp. 217~226, ミネルヴァ書房, 1987
- 2) 内田伸子, 幼児の表現を支える創造力の発達, 女子体育4月号, pp. 11~18, 1994
- 3) 西洋子・本山益子, 幼児期の身体表現の特性 I - 動きの特性と働きかけによる変化 -, 保育学研究第36巻第2号, pp. 25~37, 日本保育学会, 1998
- 4) 前掲3)
- 5) 片岡徳雄, 子どもの感性を育む, 日本放送協同協会, 1990
- 6) 前掲3)
- 7) 前掲3)
- 8) 坂根美紀子, 片山忠次・名須川知子編著, 生活保育の創造, pp. 133, 法律文化社, 1998
- 9) 前掲3)
- 10) 前掲3)
- 11) 本山益子, 子ども向けビデオに見られる身体表現 - 「おかあさんといっしょ ファミリーコンサート」を対象に -, 岡崎女子短期大学研究紀要第32号, 1999
- 12) 前掲11)
- 13) 坂根美紀子, 前掲8), pp. 129
- 14) 河合隼雄, 子どもと学校, pp. 123, 1992
- 15) 川勝泰介, 前掲8) pp. 253
- 16) 名須川知子, 前掲8), pp. 146